

トランズナショナルなコンテクストで構築される ジェンダー・アイデンティティの力学

吉田光宏

序

アメリカを中枢とするグローバル資本主義制の支配下において、国際分業による徹底した合理化と市場主義を導入し、世界規模でネオリベリズムが浸透していき、富裕層と貧困層との格差が広がる中、低層に生きる人々の生活世界が広がってきている。特にローカルのレベルでその圧力の影響を被っている人々が様々な境遇にある女性達である。しかし、彼女達は、多国籍企業、金融資本の利益を追究するグローバリゼーション体制で、なかなかその実情は見えにくい「不可視」な状態にある。

この論考では、ポスト構造主義の脱構築の理論を使い、現在のネオリベリズムを押し進めるアメリカを中心としたグローバルコンテクストにおいて、「アイデンティティ」がいかにして形成されており、どのような舞台装置の仕組みがあって構築されているのかを検証したい。そうして、「影」の存在にまわされがちな女性達の「姿」に様々な焦点をあてていくと、そこからトランズナショナルに展開される多様なスペクトルがあることを浮き彫りにしていきたい。パブリックな場であれドメスティックな場であれ、様々な社会的役割を担っている女性達の姿をポスト構造主義の理論で読み解き、現在のネオリベリズムの政治権力体制に対してのポリティカルなメッセージの抗争があることを暴いていきたい。

1. 国際分業体制におけるアイデンティティ構築のポリティクス

第一世界を中心にグローバリゼーションのネットワークを支えてきている思想とは、もともと人類史上農業の発明以来組織的に男性が中心的に構築していった価値観で、それが近代産業社会をも支えてきたものである (e.g., Connell 1987, 2002, Fisher 1982, 2000, Mies 1984)。「歴史」とは公の場での政治権力の収奪の戦いの歴史であり、国家間の外交交渉であり、国内産業の発展の歴史である。この「歴史」の表舞台に活躍し登場しその価値が公で評価されてきているのは、ほとんどが男性である。彼等を夢中にさせてきたもの、あるいは、彼等自らが創り上げてきた価値観、ひいては、それが、現在の国際労働分業体制へと結実していった諸思想とは、例えば、権威主義、成果主義、利益追求、目標の達成、政治支配関係の維持と拡大、言葉による説得力、腕力や武力に訴えた戦闘能力、地位とランクの誇示、公的立場の支配の強化などである。いずれもが、「歴史」のプロセスにおいて、社会秩序が一つの生産労働の場として機能するために芽生えていき、産業社会から今日のポスト産業社会を形成させ、その国境を超えたネットワークが、アメリカを中枢とするグローバリゼーションのシステムを展開させていった。

こうしたグローバリゼーションを支える国際労働分業体制とは、男性同士による紐帯を結束させた「ホモ・ソーシャル」な舞台であり、その背後では、その男性達の「欲望の眼差し」で構築された「他者」としての「女」の存在がある (Sedgwick 1990)。ヘテロセクシズム・異性愛中心主義の言説に巻き込まれた女性達がいる。公の檜舞台で活躍してきている人々の影でひたむきに支えてきた女性達がいる。既存の知の枠組みではなかなか理解されがたい女性達がいる。社会の周縁でその役割を淡々とこなしている女性達がいる。男性達と互角に勝負をし凜としていながらも精神的肉体的疲弊を被っている女性達もいる。

ネオリベラリズムの原理、市場主義と合理主義の経済のメカニズムなどの

グローバリズムを支えていく理念の背景に、そうした構造的「他者」として配置されているという女性達の感情の経験とは、一体いかなるものだろうか。その日の生活のために男性とは対等ではない環境で労働をする女性達が思い知らされるもの、男性の補佐的な仕事を自明なこととされ淡々とこなしていく女性達が憧れてやまないもの、男尊女卑の偏見がまかり通る職場で男性と対等になろうと働く女性達の姿が挑もうとしているもの、私的な場で、家事や育児を仕事と両立させようとする女性達が心に思いえがくもの、日々単調な家庭内労働を寡黙にこなしていく女性達が大切に思っているもの、こうした人々の思い、語り、感情、信念、そして倫理とは、どのようなものだろうか。こうした女性達の存在意義は表舞台において「脚光」を浴びることはほとんどない。そのアメリカ型の既存の家父長的認識の枠組みや価値基準は、パブリックな立場には無い人々、こうしたシステムの中に参入していない人々の存在を、全うに評価することのできるようなものではない。

異なる価値を評価するためには、文化相対主義を持ち出すまでもなく、グローバル化を支える思想にとらわれない相応の「文化のレンズ」を錬磨させなければならない。様々な経験をくぐり抜け、異なる状況と困難とを引き受けてきた女性達がいかに物事を捉えてきたのだろうか。いかに仕事や労働と向き合ってきているのだろうか。いかにこうした男性中心の世界を評価しているのだろうか。こうした問いの背後には知られざるライフヒストリーが数々ある。彼女達の抑圧されてきた声、かき消され、無視されていった声を再び呼び起こすことが脱構築の正義である。その存在を当然視され不可視化されてきた人々の生の声を読み解いていき、象徴的に「削除」されてきた人々の歴史、文学あるいは文化を再構築していくことが問われているのである。

これらのかき消されている存在にある人々の姿に焦点をあてるべく導入された概念が「サバルタン」である (Spivak 1993)。この概念は既成の認識と価値観では、見えにくい流動体的かつ偶発的な主体の在り方を視野にいれてい

くもので、そうした人々の生と声に焦点をあて、社会的に周縁にある者達のアイデンティティの在り方がいかなるものであるかを脱構築させていく。元来「サバルタン」とは、アントニオ・グラムシの概念で、こうした社会的な弱者、下流階級にある者、貧しい者、逆境の状況に追いやられている者達を射程に入れていくものである (Gramsci 1971)。必然的にこの概念には「従属」という意味がこめられ、既存の政治体制と関連したものであるが、その中に固定され静的にソリッドな形で存在しているものではない。男性中心的なグローバル化のトランズナショナルな組織の中で複数の「他者」との従属と支配という「権力関係」において、「主体」がその構造的媒体として身を委ねていくことで、時間の流れでその都度、再構成され、再交渉され、自らもその経験について物語や解釈を立ち上げて、また異なる「権力関係」におけるポジションの再配置を模索していくという流動的で動的な概念である (Butler 1993)。

ゆえに、「サバルタン」という用語は、家父長制の既存の価値規範や固定観念とは違った角度からも捉えなくてはならない概念で、人の置かれている入念かつ柔軟な状況把握が必要なことを前提としている⁽¹⁾。その人個人の多様な物事の捉え方と価値観の相対性と様々な社会的「状況コンテキスト」を分析して脱構築していくことで初めて浮かび上がってくる (Derrida 1976)。これまで、無視され削除されてきた、あるいは、認識されてこなかった多様な経験を再考させるものである。例えば、個人の生活史、体験、感情を分析の視野に入れ、ローカルな概念で紡ぎ出される複雑な現実の人間の声を感情を息づかいを理解するためには、あるいは、一人の女性の権利や抑圧された人達を理解するためには、その暴力を企む舞台装置の在り方を入念に暴いていかななくてはならない。脱構築の「柔軟なアプローチ」で分析することで、そうした人々の生活世界における感情と苦悩とを浮かび上がらせていかななくてはならない。ネオリベラリズムを押し進めるグローバル化の言説

において不可視となっている「サバルタン」状況を潜りぬけてきている人々の倫理と思想と道徳とを、異なる知の枠組みを辿らなくてはならない。家父長制的な資本主義体制において、男性と比肩する名誉を勝ち取ってきた女性達の経験と努力とを記述しなくてはならない。例えば、最低賃金で下働きをパート社員や派遣業務として工場労働や補助的事務作業をになう女性達の経験とはどのようなものだろうか。あるいは、男性の医師とほとんど同等の名誉と評価を勝ち取った女性の医師の信念と努力の経験とはどのようなものだろうか。

一連の既存の体制の政治的組織構造、すなわち、官僚機構、政治団体、企業、協会、教育機関、メディアなどが創り上げる社会秩序の総体が「公」の場として機能する。この「権力」の総体を形成する一連の「言説」としての「ヘゲモニー」において、「個人」の在り方とは、心理面、精神面、医療面、経済的境遇、社会的立場など、内面から外面から規格化されていく⁽²⁾。感情と意識の経験に至るまで「主体」の在り方が「呼び掛けられ」、「主体」として、「他者」との「関係性」において構成されていく「生政治」の権力が、個々の人々の認識の隅々に「書き込まれ」行き渡り、それが、究極的には既存の覇権構造を成立させている (Foucault 1980)。

家庭において「子育て」という次世代労働再生産という役割を担っている者達は、グローバルなコンテキストにおいて生産者として覇権の中核に入っていくことはなかなか困難な状況におかれているのが現状である。資本主義の拡大とは、女性に家庭労働を課す一方、パブリックな仕事においても社会階級の周縁に位置づけることを正当化させてきている⁽³⁾。事態を更に悪化させているのがグローバリズムの言説である。グローバルな資本主義をなす思想では、一方的に「合理主義」の「自由主義を神聖化」し「市場原理が必然的なもの」とするネオリベラリズムの方向がヘゲモニーとしてトランズナショナルに構築されている。労働の合理化を進める国際分業体制によって世

界秩序は男性中心的なシステムで国境を超えた形で作動し、他方で第一世界における女性達のポジションもその平等が倫理として主張されてきているにもかかわらず、その議論に対して懐疑主義の眼差しが投げ掛けられ、その姿と声と歴史とが再び男性中心的なモデルの中で再構成され周縁化されているのである。

ジェンダー化された女性の「身体」は男性中心的な女性労働の国際分業体制を通して蝕まれてきている。第一世界の女性は、「次世代再生産」に携わる一方で「生産者」でもあり同時に「消費者」である。男性中心的家父長社会での経済生産関係では、この女性達の存在は見えにくくされ、例えば家内労働において「不可視化」されているのである。こうしたグローバルに広がるジェンダー化された不平等構造においてサバルタン状況に配置された女性の「身体」とは、現在の地球上の資本主義経済におけるヘゲモニーの利益を追究する政治的な経済的な欲望が縦横に交叉する場もなっているのである。このメタファーとしての「身体」が性差別を被っていることの審議項目は国際金融状態における超搾取状況の無関心性のもとに議論上にひきだされることもなく、議論に上ったとしてもバッシングの対象にたたされているのである。つまり、女性の「身体」がそのグローバリゼーションというイデオロギーのもとで、家父長制の暴力に曝されている時の感情とはいかなるものかを暴いていかななくてはならない (Spivak 1999)。第一世界の政治的経済的領域を支配する男性達が恩恵をこうむっているところには、実は、そのテリトリーから排除された者達の生と姿とが存在し、あるいは、その中枢に関わろうとしている姿とが存在する。そこには「個人」の様々な物語があり、錯綜した感情がある。喜びと悲しみ、達成感と喪失感、充実感と絶望感。こうした個人の感情の経験と息遣いは、個人的なものでもなく、瑣末なものでもない。既存のグローバルな覇権構造のコンテクストに、こうした個人の経験と感情は「ヘゲモニー」と絶えず交錯しており、そこに無数の形にはなら

ない流動的なポリティカルなメッセージが発せられているのである。

したがって、「ヘゲモニー」とは、支配体制の誤った認識ではなく、むしろ、個々人によって、読みとられたり、同意されたり、解釈されたり、再構築されたりすることのできる装置でもある。「個人」は、資本主義を形成する既存の概念とカテゴリーに抗っていくような「解釈」を行い、「物語」を語り、「パフォーマンス」を創り上げることも経験していくこととなる。それも、ヘゲモニーとは、異性愛主義・ヘテロセクシズムの政治性に裏付けられたものであるため、男性の欲望の眼差しによる「他者」として構築された「女性」が読み取る解釈と抵抗的感情とが絡む。さらに、「他者」として排除されていた同性愛者らによって語られる思いと主義主張も絡む。こうした「構造的他者」あるいは「認識上の暴力」を被ってきた「個人」によるナラティブ、読み替え、解釈、感情、理念とはどのようなものか。ここでの「個人」とは、ジュディス・バトラー (Butler 2005) に倣い、「他者」との関係性の中に避け難く埋め込まれている「倫理的暴力」や「呼び掛け」のプロセスにおいて、逐次構築されていく「行為遂行体」として言語と記号の中で形成されるもので、また、「象徴的媒体」として時空を超えて構造化されるものである。

人は「他者」に対してのみ自伝を語る。では、周縁化された女性達は、「ヘゲモニー」に対して、いかなる政治的姿勢で、どのようなストーリーを、どのような方法と媒体で表現しているのであろうか。草の根のレベルの女性達の世界観から紡ぎ出されるライフヒストリー、ナラティブ、感情の発露は「ヘゲモニー」に対していかなる政治的な意味合いが「委ねられている」のだろうか。そして、その「構造」としてのアメリカを中枢とするグローバリゼーションを支える「ヘゲモニー」との関係性において、どのようなオルターナティブな「言説」を構築してみせるのであろうか。このような問いから、彼女達のナラティブがいかなるものかを浮き彫りすることで、異なる生活世界の知の枠組みを、オルターナティブの価値観の世界を見出すことが脱構築の目

的である⁽⁴⁾。

「サバルタン」は受動的な被抑圧者としてその状態に甘んじて、ヘゲモニーの呼び掛けを静かに受け入れているのでは決してない。そうではなく、こうした苦境を経験してきた者達の思いと解釈と感情とを様々に織り込ませているのである。そうした「声」は、象徴的に表現されているのであり、そこに読みとれるポリティカルな意味合いを浮き彫りにしていくことは可能であり、それを解きほぐして解釈してみせていくことが「知識人」の使命であるとエドワード・サイードは力説する (Said 1994)。現体制のヘゲモニーを構築し権力を構成する知識階級に属する者達が、本来、権力装置のシステムを暴き出すというサイードが説く「知識人」のレゾンデートルに反するという自家撞着に陥ることなどあってはならないことであろう。

適宜、その置かれたコンテクストを戦略的に把握した上で、あえて、第一世界の男性が「本質的なもの」と刻印したものを徹底して疑問に伏することにより、自明視されたものに対して敢えてその存在意義の正当性の根拠を揺るがすことにより、異なる立場と声を表明する「抵抗言説」を形成させていく戦略をスピヴァクは「戦略的本質主義」と呼ぶ。この戦略的視点によって、これまで第一世界の男性から日常生活の価値観においては見えてこなかったものを、そして第一世界の女性達の毎日の経験の意味を、「消費」と「仕事」に時間と労力を投資していく姿の意味を、彼女達の視線を通して紐解いていくことにより、多様な人間の在り方と意義を見いだすことができる。

2. 消費と労働がもたらす苦悩によって紡ぎ出されるアイデンティティの流動性

グローバリゼーションが「自我」にもたらすものとは一体何かを浮き彫りにすることが、こうした「状況コンテクスト」で、女性達のいかなるポリティカルなメッセージが繰り返されているかを読み解くことに不可欠である

う。ジャック・ラカン (Lacan 1966) によれば、「自我」とは、第一に、自己が「他者」との関係性において、「他者」の欲望を取り入れることで、自らを「想像」していくことで芽生える自意識である。自分が自分であるという自己認識とは、「他者」を介在しないと認識できない。「他者の承認」のうえに「表示」された存在が「自己」でもある。「他者の承認」とは、「他者」が「一方的」に押し付けるものではなく、「自己」と「他者」との相互確認とにおいて構築される。この意味で自我の意識や「他者」からの「承認」とは「想像」上の「フィクション」あるいは「文化構築物」である。しかし、「象徴」の基盤がなければ、自己は他者との関係性において、この心的装置を働かせる事はできない。また、そこで、自己の「想像力」と「幻想の能力」とを言葉による認識において確立しようとしても困難が生じる。

第二に、この「自我」の認識とは、時間軸において構築され、「他者」と「自己」とがおりなす「物語性」を伴う。様々な「他者」との出会いと人間関係において触れ合う「生活史」が形成される。つまり、「自己」とは、複数の「他者」との関係において時間の流れで無尽に織り成されていく「物語・ストーリー」の「プロセス」である。時間の流れで構築されていくもので、そこに「生きている」という「自負心」が、「自己」が「主人公である」という「自尊心」が生まれる。自分がその物語の中で何者であり、どこへ向かっているのか、どこでどうしたら良いのかを探っていく絶えざる作業が「アイデンティティ」形成でもある。

第三に、「自我」の認識とは「言葉」という意味伝達媒体を通じて形成される。しかし、ここに原初的な「疎外」が埋め込まれている。この言葉自体は「音素」の纏まりであり、原初的には指示や意味伝達と同時に否定と排除をする「他者」の「シニフィアン」である。「言葉」は、「選択」と「排除」、「表出」と「抑圧」、「疎外」と「安堵」というような二律背反性の思考によって意味が意味として認識される。絶えず、「排除」の作用があるため、その構築の

成され方には「想像力」や「信頼感」が不可欠なものである。しかし、その自己疎外感と自己安堵の隙間があるからこそ、時間を通じて「他者」との「物語」を展開できるのだ。

第四に、「自我」とは、意味の伝達媒体としての言葉を介して、「読み手」と「語り手」との「コンテクスト」の間において「アイデンティティ」として逐次「確認」されると同時に「誤認」もされていく。言葉と意味との関係性は「エクリチュール」の作用を考えた時、その意味を固定させ決定させることは不可能であるか、その意味自体が双方での認識の運動と想像されていくもの、創り出していくものである (Derrida 1976)。さらに、その意味作用、何を言おうとしているのかは、「他者」との無数のやり取りと時間の流れの「差延」のプロセスで動的に認識の運動の中で逐次誤解と誤認を孕みながら理解をしていると「想像」していく。したがって、「他者」との関係性で織り成されていく「自我」である「アイデンティティ」とは、固定的なものではない。動的なもので、揺れ動くもので、疎外や矛盾さえ孕みながらも「創造」されていくものである。

こうして、人間は、その言葉と意味の不安定な網の目に住まう。換言すれば、「他者」を通じて、「創造性」と「想像力」によって構築していくという「文化の作用」によって、人間に何らかの十全性を与えてくれる。芸術や音楽や絵画でも、そうした言葉の「他者性」を超越して訴えかけてくるもの、感動、癒し、心地良さ、人間性、幸福、感情、共感、希望、理想、など「言葉」を超えて、無意識の中で「言葉」やイメージの持つ概念が共鳴しあい、人の心に働きかけるものがある。

ゆえに、自分が社会において異性であれ同性であれ様々な「他者」から必要とされないとすることほど、辛い状態はない。必要とされていることとは、様々な人からの要求や欲望の渦の只中に自らがあるということである。欲望の眼差しで見てもらいたいという欲求である。その欲求を満たす手段とは、

一方では、働くことで人から認めてもらうことであり、そうして、更に自分の価値を評価してもらい、その人達のために役に立つこと、回りの人達からその価値を認めてもらうことである。また他方では、他の人が欲望するものを所有することで、自分の価値を高めて、評価してもらうための消費行動によって、購買能力の顕示によって存在価値を示し、それによって回りの人達からその価値を認めてもらうことにある。前者と後者は同じコインの表と裏の関係にあるが、この認識は、人間のアイデンティティ形成にあてはめていくと様々な要素がからんでいく。個人の資質、知識、経験などから生まれていく学歴、職業、資格、収入、居住形態、趣味、趣向などから、それぞれの階層と「社会空間」とにあった形のライフスタイルと価値観が「ハビトウス」として生まれている。

例えば、「独立した世帯を持つ」という「コンテキスト」は、この仕事による自己把持と消費による自己顕示とを同時に披露していく舞台となり様々な「ストーリー」を展開する場である。つまり、「かけがえのなさ」という自己認識において特定の人達、例えば「夫」や「子供」といった「他者」から紡ぎ出される「関係の絶対性」において、お互いを認め合う異性によって社会的に認められる形で結婚する。そうして次世代を育む。こうした家族を育むという行為とは、働くことで独立して自分の思うライフスタイルを営むことで社会で認められるということである。更に、家庭での諸々の仕事を通じて家庭内の成員からかけがえのない存在であることを認識することである。

また、現在、晩婚化が進み、結婚に踏み切らない人々、踏み切るきっかけすら与えられていない人々が多数存在している。そうした人々にとっての、「生きること意味」「他者から認めてもらうことの喜び」の手段が多様化してきている。つまり、社会的に固定された他者との関係において「かけがえのなさ」を構築するのではなく、不特定多数の人々との「状況コンテキスト」

の中で紡ぎ出される「関係の偶発性」において構築されるアイデンティティである。そうした不特定多数の複数の人々と偶発的に即興的に「ストーリー」を紡ぎ出していく行為において構築されるアイデンティティである。

こうして、既婚の者であれ、未婚の者であれ、自己を認識するとき、「消費する」ということと「生産する」という異なる様々な類いの舞台で、それぞれの立場や役割を持ち、様々なドラマを生み出し「ストーリー」を多様に展開していく何連にもまたがる複数のプロセスにおいてアイデンティティが構築されていく。ここで、それぞれが、アイデンティティ構築のプロセスにおいて、人にもたらずものとは何であろうか。ジグムント・バウマンによるアイデンティティのポスト構造主義的解釈が、その問いに多くの示唆を与えてくれる (Baumann 2000, 2004, 2005)。まず、消費行動の場合を見ていこう。第一に、「消費」とは、具体的必要性を満たすのも人間が生きていく上で不可欠であるが、それだけではなく、「欲しいものが欲しい」という「物欲」を満たすことである。この「欲望」は資本主義社会を動かしている原動力でもある。自己発生的、自己推進的欲望である。自分は「あれ」が欠如していると思いきみ、「あれ」を果てしなく求めていこうとする。その欠如とは満たされることのないものである。満たされることのない欠如した状態とは必然的に、不安と焦燥とを人に与える。「あれ」を所有していないがために不安に思い、不信感を覚える。しかし、「あれ」を所有した、消費したと思った瞬間、果てしない快感と満足感に酔いしれることができる。

第二に、「あれ」を得たことにより、「流行おくれ」の「古くさかった」過去の自分が「新しく」なったように思え、周囲からの眼差しを虜にしていると幻想する。様々なデザインと色彩と素材と音質による商品の洪水が都会を襲っている。洋服、アクセサリ、靴、化粧品、バック、鞆、財布、腕時計、インテリア、車、音楽。そこには、「限度」などという言葉があってはならない。そうしたものは、一時的に、時間の流れの中で「美的」な付加価値を備えた

ものとして、様々に形を変え、素材を変え、色を変え、音を変え、五感に心地良い刺激を与えつつ、際限なく時空を満たしていく。そのために、時間の流れの力に抵抗することなど到底不可能である。それらは、皮肉なことに時間と共に古くなっていくものである。人は、ライフスタイルの中でこうしたものを選び購入していくとき、自己を演出したと思う。それも一人の聴衆の前での演出ではない。複数の、あるいは不特定多数の欲望の眼差しを前にしてのパフォーマンスである。人は、時間と場所と相手によって、自己をその都度変化させていくことが要求されるのである。

第三に、消費は個人的なものである。生産活動と異なり、社会的で秩序ある集団活動とが大切な生産活動に対して、消費は、単独で私的な一時的な欲望を満たすものである。そこに、個人の趣味の良さ、美的センス、洗練、洞察力、直感といった審美的、美学的資質が反映される。生産活動とは、倫理的、すなわち、義務と約束事と知識の積み上げと経験とが必要な活動であれば、消費とは審美的な感覚と洗練された直感とが求められるパフォーマンス的な行為である。

第四に、こうして趣向としてアイデンティティが形成されていくが、それは、時間の流れの中で変化していく流動体のようなものである。様々に視界の前に引き出され魅了されながら、果てしない欲望に突き動かされ、「あれ」を消費していき安堵もつかのま、また新たな焦燥にかられていく。「あれ」で、何か「今までより新しい」自分を心地良い感覚を得られるが、また、他のものに目移りしていき、次ぎから次ぎへと、異なる自己の在り方があるのではないか、あるに違いないと妄想に取り憑かれていく。アイデンティティとは静的なものではなく、静まることすらしめない、動態的なもの、液体のごとく流動的なものである。アイデンティティとは、大量消費社会の現代社会において、個性性、確実性、継続性を失ったものである。「あれ」で満足をしたという固定的アイデンティティに安堵感に浸ることができるような時空

などは存在しない。絶えず生成させ変化させられていく媒体が消費するアイデンティティである。必然的に、一時的にせよ、所有したことによって満たされた感情とは、やがて次なる欠如感に置き換えられていく。

「生産活動」はどうであろうか。第一に「働かざる者食うべからず」という言葉が端的に示唆するように、労働をする人は「普通」であり「当然」であり「評価されるに値する」存在である。一方、仕事をしない人は「非雇用者」であり「異常」であり「失業者」であり「評価するに値しない」存在である。人が人として「認められていく」ためには「働くこと」は大前提のことである。仕事はその人が何者であるか、どのような社会的立場と地位にあるのかという感覚を与える。その人の労働の種類で社会における秩序形成にいかなる位置にあるかということ「分類」する。人の職種とはその人の道徳的評価を構築する媒体である。その人の職種によって、その人に対する、様々な感情が差し向けられていく。好意、憧憬、敬意、畏怖、羨望、無関心、軽視、侮蔑、嫌悪。ただ、いかなる職種であれ、自分自身にとっては、「自己実現」の手段であり、そのプロセスを通じて「人間性」を切磋琢磨していくものである。評価を高く奪取できる舞台でもあり同時に、そのキャリアがひいては名誉を剥奪される舞台でもある。自尊心や自負心を勝ち取っている時は良いが、それがどのような場で誰によって打ち砕かれ、自己否定や不安定性をもたらすのか分からない両義的な感情が交錯していく媒体でもある。

第二に、仕事とは、何らかの目的や目標があり、それらを達成する、あるいは、具体的な商品を形作っていくことを達成するものである。付加価値を生産するこのプロセスは、効率的なものでもなくてはならない。しかし、いかに効率的にある目標を達成したとしても、それは、時間の流れの中で、一時的に達成したものにほかならない。すなわち、努力による達成感とは、一時の到達感であって、儂い感情である。次なる目標の達成を求められ、再び、それに至ることができるか不安と焦燥に打ちひしがれながら奮闘努力しなく

ては「失格」のレッテルが貼られるかもしれない。不信感と欠如感に苛まれている。ここでも、仕事を通じて、相手からの認知、人から認められているという充実感には確かに得られる一方で、絶えずそこでは、欠如感と至らなさを味わっているのである。それも、消費のアイデンティティ同様に、流動的なものである。高度産業社会においては、消費者とは変化を追従し多様性をこよなく愛する。必然的に、それに対応する仕事とは、そうした変動に絶えず臨機応変に、柔軟な変貌を遂げていかななくては、「市場」で価値あるものとしてみなされない。仕事という媒体は、こうして、その人の立場と身分と生活について不安定性をもたらし、将来への継続性の不確実性をもたらし、その生産共同体の目標と財産と利益の破綻の危険性とに裏打ちされたものである。

第三に、働く仲間同士において、絶えずその能力が評価され監視されている。そこで、競争力、生産性、効率性などが個人の肩に重くのしかかる。その中で、個と個がぶつかりあい、自然淘汰の法則の中で、弱者と強者とに別れていく弱肉強食の殺伐とした世界が、一人の仕事人の前に広がっているのである。更に、長期安定が補償されていないことも、このネオリベリズムの競争の原理において、ごく普通の労働条件である。報酬でさえ、そうしたものの結果や成果や業績として出されるものであるから、魅力的なもののように、実は、その仕事人の仕事を評価した点数が変換されたものにすぎない。仕事場において、仲間意識や賞賛を分かち合う影で、人は、不安に苛まれ、羨望と敵愾心すら渦巻く現実があるのである。

第四に、こうした事柄を一意専心に没頭することが労働倫理であり、「天職」として全うするに足るものが労働である。仕事とは、社会的に期待されている必要なものであって、必ずしも個人的欲望を満たすものではない。しかし、そうした労働を一つの美学として捉える見方もできる特権的な職業もある。遊びが労働になり、趣味が仕事になり、一日中熱中して没頭している

生産活動である。彼等は、成功をつかみとったエリートで、仕事とは個人的なものでもあり、美学的なものでもあり、遊び感覚での楽しみを享受している人達である。しかし、彼等の多くもまた、時間軸でその立場は到底固定されたものではない。変幻自在な消費者やユーザーや顧客らを相手に、その気紛れな「欲望」を一時でも満たせるものは何かということを個々に提供できるような、相応の柔軟な戦略と機智とが要求される。更に、そこにあるのは、先延ばしの状態で、ともすれば、その状態が突如反転して、逆に個人にとつもない苦痛と重責とストレスをもたらすかもしれないという不安に苛まれているのである。

こうして、仕事をするアイデンティティの場合も、消費するアイデンティティの自己認識同様に、流動的なもので、絶えず、生成流転する媒体が「身体」である。人は不安に怯え、あるいは、「現実へ逃避」しているのである。現代社会の特徴として、労働生活においても「今日不安定さはいたるところにある」のである (Bourdieu 1999:81)。ポストフォーディズムの現代に大前提とされているネオリベラリズムによって、「主体」は甚だしい変化と疎外と否定と断絶を経験していると言わねばならない。自己顕示と自己認識をする舞台のはずが、不信感、欠如感、焦燥感、虚無感、喪失感に苛まれている「わたし」を「現実」として体験する舞台であり、緊張感に打ちひしがれている「わたし」の「現実」の理解し難い苦悩に満ちた感情を体験する舞台でもあるのである。

たしかに、人がその価値を認められる時、安堵感を抱き満足感を抱く。しかし、その安らぎとは、ラカンが分析するように、こうした殺伐とした「身体」の「現実界」の上に「幻想」された世界、つまり「想像界」として機能しているにすぎない。アイデンティティとは「言語」によって構築されたものである。人は「自己」を「他者」からの「言葉」や「言語」を介して認識する。「言葉」には実体はなく、それ自体はなんの意味を成さない「空虚」なもの

である。そこに関係性、文脈、コンテキストが入って初めて意識の世界にある「想像界」においてコミュニケーションができる。ここで互いに話ができるのは、この「言葉」の空虚さを共有するがために、固定された意味合いではなく、そこに様々な解釈や意味が意識の上で沸き上がって初めて可能になる。

原初的には、「言葉」とは、幼児が、親という自分とは異質な「他者」から差し向けられた愛情の「シニフィアン」である。幼児は、その「他者」からの「言葉」を認識し始めながら「欲望」を取り込むことで「自我」を芽生えさせる。この親子関係で、相互意思と相互依存による信頼関係を前提にして初めて、相手は何を「欲望」しているのかという「解釈」あるいは「意味の読み取り」が成り立つ。だが、ここで、先述したとおり「言葉」には二面性があり、何かを指し示す機能があると同時に、それ以外のものを「排除」する機能がある。例えば、親は産まれてきた子に「心地良さ」、「安堵感」、「温もり」、あるいは「感謝」を注ごうとし様々な「言葉」を投げ掛ける。それらは、いずれもアンタゴニズムの対極にある潜在的意味内容、例えば、「不信任」、「不安感」、「孤独感」を措定した上で、それらを「抑圧」し「否定」している。したがって、この関係性では、相手が一体何を意味すると「解釈」するのが妥当なのか、何を「欲望」しているのかといった「他者」との「仮説」のやりとりの循環の上に複数の意味が立ち上がり、妥当な「シニフィエ」を想像していく。こうして芽生えた「自我」とは、だが、原初的には「疎外」と「不安」と「恐怖」とが介在するものである。ただ、ラカンを介してギデنز (Gidens 1991:35) が言うように「存在論的安心感」に統御があって初めて、アイデンティティ形成が可能となり、そこで、「他者」との相互の関係性を保ちつつ「想像界」において自己を築いていくことが可能になる。自己は、それにより、共感する能力をつけ、感受性を養ったり、何かを成し遂げようとする欲望をもったり、利害の衝突を乗り越えようとする意識や忍耐を培ったりすること

ができる。つまり、自己とはこうした認識可能な異質な「他者」との相互関係のプロセスにおいてアイデンティティとして文化的に構築されるのである。

「言葉」とは、「他者」の「シニフィアン」である。したがって、「言葉」より組み立てられていく「自我」とは、周りの「他者の欲望」にとりこまれている、つねに不安定な虚無感を抱えた「他我」である。「他者」との関係において自己としての安堵感とは、解釈として構築されるものであり、かつ、潜在的排除という作用と仮説の循環を伴うものであるため、自己のイメージとは最初から「虚构」のものである。「自我」とは「他者」の中との関係において構築されるゆえ、「わたし」という時の「身体」、その指し示すものとは実体の無い、「空虚」な空間が果てしなく広がっている広陵とした場である。

合理性と効率性を求め推進されているはずのグローバリゼーションの時代において欠如してきているものが、人が人として存在させていくためのこうした異質な「他者」との特定の関係性であるとラカン派哲学者ベルナン・スティグレル(2006)は指摘している。ここでの「他者」とは、仮説の循環を組み立てることを迫り潜在的排除の要求を強いる媒体である。だが、この葛藤と疎外を経て、自己は創造性、文化、意味、人間性、人間的豊かさを培うこと認識できる存在である。こうした「他者」との接触と相互関係において、「友愛・フィリア」を培うことができる。ラカン派社会学者である檜村(2007)が言うように、こうした異質な「他者性」との遭遇、喜びや愛情だけでなく葛藤と苦しみを分かち合えるような社会において、人は人として人間性を培うのである。

ところが、人間の利便性を追究するため、現在のネオリベリズムによるグローバルな資本主義体制の戦略が合理性と効率性を最大限に引き出す試みは、皮肉なことに、人間が自己確認し自己実現していくために原初的に用意されていた「疎外」と「葛藤」の上に自己を練り上げられるための解釈力と創造力とを崩壊させてもいるのだ。グローバリゼーションの「歴史」の悲劇

とは、そのために押し進めて来た「合理性」を渴望するあまり、その究極的な効率性を高めることに走るあまり、人間が人間であるための根底的なものを瓦解させていることである。更にそれを悪化させることには、気紛れな「他者」、それとの関わりは時間の流れで次々と替えられる「他者」、それも認識することすら不可能な数多の「他者」、異なる類いの審美眼を持つ「他者」である聴衆の前に立たされる。「舞台装置」などという固定的なものではなく、足下の床が不安定に揺れ動き、台本も次から次へとすり替えられ、自分の錬磨しあげた演技などはほとんど無視され、異なる仕草と台詞と声色を要求されるのである。自己確認もそれに応じて変化し、やがて、自己が自己であることが困難な状況を招いている。

日々めまぐるしい変化への対応を余儀なくされている我々は、人々との共有の場や共感の場が激減していく。そうした場とは、様々な秩序、倫理、文化、理念、理想などを人々に考えさせ、それにより、そうした一連のシステムを自己に内在化させる。そこに人は、新たに、感情、友愛、愛情、喜びを感じるとともに、これらとは逆に、挫折、苦しみ、葛藤を覚える。ここで欲望が産まれてくる。こうした、人を人たらしめるシステム全体を「象徴」とスティグレル (ibid) は呼び、この「象徴の貧困」が起きているとする。つまり、合理性のみを追究することで、こうした人に秩序体系と存在的安堵感をもたらす象徴的システムが無化されていくことにより、「他者」との遭遇によって世界の様々なルール、秩序、構造、理念を考えることも難しくなっている。トランズナショナルな状況コンテキストで「象徴的」なものが瓦解してくる。人が人として存在し生きていくための人間性と精神的な豊かさや発展へのエネルギーをもたらすような「象徴界」の中に人間として自己は位置づけられている。そうした舞台が不安定なものとして働き人が人であるべき拠り所とする人間の根幹に関わる存在論的な基盤が揺るがされ、「不安定なハビトウス」を不安感、ストレス、苦しみを伴って背負わなくてはならな

い状況に追いやられているのである。

「象徴の貧困」により、自己の在り方が他者との関係において形成維持が困難になってきていることで、人は自分が自分であるという自己把握することがなくなってきている「個体化の貧困」が起きている。ここで、失われているのは、他者との接触によって生じる同一化や共感、あるいは摩擦や葛藤といったプロセスそのものである。つまり、自己が特定の異質な「他者」との同時的なやりとりで自己内部において様々な感情を「取り入れる／備給する」ことによって、自己確認、自己保存するという「シンクロニゼーション」の場が失われている。また、特定の「他者」と継続して時間軸の中で変化させていく「ダイアクロニゼーション」の場が失われている。「個体化」とはこの「シンクロニゼーション」と「ダイアクロニゼーション」によって、人が人として生きているという感情をもち、仮説を組み立て「自己」が「自己」であるための創造性を形成し、自分が固有の存在であるという感覚を生み出すものである。しかし、こうした、特定の人々との対話という継続した時間の流れで行われるような相互交流の場が減少してきている。そこで生じてくる共感や葛藤などの経験において「自己」が「自己」として学べる条件や環境が消失してきているということになる。人間が人間であるための条件が現在危機に晒されていることでもある。

「他者の欲望」の中に自己を見出す。この欲望に取り込まれていることを意識することは、人がいかなるものであるかを動かす原動力でもある。これが崩壊すると社会的な安定秩序や人間が人間であることを支える「象徴的」な基盤が崩壊していくことにつながる。人の痛み、喜び、葛藤、苦しみ、愛情を分かち合えるような社会において、人は人として人間性を培うのである。ネオリベリズムが押し進められていく現在、人に対する尊敬や愛情や共感が、そして、物事を達成しようとする欲望や希望や理想が、刻々と流れていく時間の中で損なわれつつあるのだ。換言すれば、現在、この人と人との相

互の「承認」を可能にする関係が決定的に貧困になっている。これは、人間が人間として喜びを分かち合い共に何かに対して価値を見いだして苦勞しながらも自己実現をしていこうとするような気力が、仮説を組み立てていき自らを認識していこうとする意志が、葛藤と虚無感に向かい合っていくながらも自己がいかにあるべきなのかを探ろうとする思考が衰弱しているということだ。グローバリゼーションの流れのアンタゴニズムとは、一方でそうしたものを合理化の名の下で排除していこうとしながら、他方で異なる形で虚無感と欠如感と不信感を徹底的に人の内面から煽っているのである。

3. グローバリゼーションに抗する女性の「抵抗言説」の脱構築

ここで日本の都市部で「仕事」をし「消費」する女性達の姿を浮き彫りにするために、脱構築の戦略的手法を發動してみよう。日本の都市部の働く女性達は、パブリックの場であれ、ドメスティックの場であれ、「仕事」に価値を見出すジェンダーである。同時に、「消費」にも価値を見出すジェンダーである。だが、見てきたように、家父長制による男性中心主義的な資本主義体制において、女性達は「構造的他者」として位置づけられ、周縁の立場に配置していくことを正当化させるヘテロセクシズムの言説は、日本においても激しく吹き荒れている。日本での女性は公的な場でも家庭内の場でも「母性」を期待される(船曳 2003, 上野 2002, 1990)。そうした資質が求められていない場であっても、なんらかの形で、仕事に成功していくと「女性ならではの働き」と賞賛されていく。ネオリベラリズムの伸展するグローバル化社会において、徹底した合理主義で、日本を含めた第一世界の女性は、「情動労働」の中心的存在として男性の補佐役をし、一度会社のコストに負担になれば解雇されやすい一方、夫である男性の稼ぐ賃金は家における消費を十分なまでにまかなっていることが自明視されている(Harvey 2005)。女性達は家において孤立しており、家での「仕事」役割は「不可視」な存在とされ、

大抵の場合、「外」では「働かない」か「働く必要のない」存在とされ、働いたとしても「補助的」な事務を任されるか、男性と対等な責務を全うしようとする、厳しい競争に打ち勝つ相応の努力を強いられる。この中で、男性と互角の「卓越性・ディスタクシオン」を競う女性もいる。異なる「ジェンダー・ハビトウス」⁽⁵⁾に参入していく彼女達の積み重ねてきた努力と胸に秘めてきた信念と果敢なる実行力とは、並大抵のものではない (Bourdieu 1998)。

だが、他方で、男性を逆に周縁に追いやる舞台装置を造り上げてきてもいる。もっぱら「消費者」であることが、夥しい種類の「女性雑誌」によって、それも異なる世代と異なる「ハビトウス」によって様々に企画編集された印刷物の数々によって、煽動され、正当化され、夢を見させられる。だが、同時に、そうした女性達自身も思春期から年齢を重ねて行く中で果敢にそうしたものに呼応した感性を少しずつ磨いていく。トランズナショナルな形で加工された数多有るきらびやかにディスプレイされた商品について熟知し、自らのものとして購入していく洗練された知識と趣味をも蓄え、底知れぬ貪欲さを持つ果敢な「消費者」でもあり、社会の消費文化においては中心的な可視的な役割を担う。

アイデンティティ形成とは、「他者」との関係性による「かけがえのなさ」であったが、「身体」とは、トランズナショナルに広がる欲望と、絶えず生成流転するアンタゴニスティックな感情とが、絡み合っていく「象徴的媒体」でもあった。また他方で、人間が人間であるがための「恒常性」と「固体化」とを、その足下から揺るがしていこうとするグローバリゼーションの流れが、「身体」を縦横に交錯していく。つまり、一方で、こうした「身体」の流動性の対極には、「良き母であれ」「よき妻であれ」といった一連の「日本人女性の品格」という「言説」をつくる権力装置が、「身体」に働きかけていく。流動的身体の流れの媒体としての女性の身体の在り方を、押し止めていくか

のごとく家父長制的男性原理が支配するグローバリゼーションの覇権構造に固定し繋ぎ止めていく桎梏の楔がうがたれる。「身体」は「精神」を満たす「器」などではなく、「精神は身体の牢獄」なのである (Foucault 1979)。

だが、他方で、これに抗するかのよう、「個人」の「消費」に多くの時間と膨大な知識と豊かなセンスと資金とを投入していく。これと呼応して、「消費」を巡るナラティブが様々に語られる。例えば、女性達の女性達によるスピリチュアリズムによる「靈的」説明とは、「自己中心的」な欲望を果敢に語り、「個人の幸福」と「現世利益」の追求を貪欲に認め、「己の恋愛」の感情を成就させ、「健康」と「美」を獲得することで安寧とを重ねて行く語りを紡ぎ出す⁽⁶⁾。異なる状況における様々な女性達が「消費」による美を錬磨させていくことで、また、そうした「個人」の行動をこうした「言説」を通じて正当化させていくことでネグリとハートの言う「マルチチュード」の一布陣として性支配構造に抵抗する行為遂行体となっていくのである (Hardt&Negri 2004)。グローバリゼーションの知の枠組みにおいて構築されているアイデンティティに抗して、つまり広陵とした時空にある身体に対して、とらえどころの無い身体に対して、流動的な身体に対して、いかなるアイデンティティの脆さと苦悩と儂さへ徹底的に抵抗する、オールターナティブな世界を作り上げ、そこに、「自分個人」のアイデンティティの在り方を象徴的に具現化させているのである。

バウマン (Bauman 2005:93) はグローバル資本主義体制における主体の「身体」とは、隠喩的に「楽器」であると同時に「演奏者」であり、かつ「聴衆」であると言う。つまり、「身体」とは「心地よい感覚を引き出す楽器として演奏」するが、同時に「他者」としての「聴衆」を内部に取り込んでいるため、その様々な期待に応えていこうとして厳しい修練を受けいれているのである。その身体への調教の厳しさは一様ではない。複数の趣向を持った複数の「他者」との関係の欲望に応えていく時、一方で、聴衆の期待を満足させ

るパフォーマンスを繰り広げることのできるアイデンティティを構築させたかと思えば、その「ハビトウス」の在り方はもはやソリッドな固定されたものではなく、時間を経ることなく、すぐさま他の聴衆の要望に応えることのできるフレキシブルな形で、異なった物語を形成して、そこに新たな技術と修練が必要なアイデンティティが構築されていかななくてはならない状況にあるのである。換言すれば、「主体」はもはや「一望監視装置」ではなく「多望監視装置」において様々に翻弄されているのである。癒しや感動や心地良さを得ることができると同時に、そこに、限界や苛立や釈然として納得できない欠如感に苛まれているという両義的な意味を架せられている身体をひたすら構築していくことを欲望するのである。音楽と社会の関係を分析したピアニストでもあるサイド(Said 1991)が『音楽のエラボレーション』の中で力説するのは、一方で、音楽家の果たす社会での貢献とは、現体制の政治形態の社会編制体を錬磨させていくことだけではなく、他方で、そうした権力状況に挑戦し、攪乱し抵抗することも表現できるということである。政治の在り方に既存の階層的関係だけでなく、新たなアフィリエーションを形成できる全体的見取り図が異種編成音として奏でられていき、それを様々に鑑賞していくという言説的实践が「身体」を通じて奏でられていき様々に評価しているのである。

女性の「身体」とはグローバルな聴衆の前で、様々なジャンルの音楽が、異なる主題と旋律と陳述とが重なり合う不協和音が奏でられていく媒体である。一方で日本人の「品格」を奏でるためのリズムとメロディーとハーモニーの編制を錬磨させていく。夫を支えようとする時の立ち居振る舞い、母として子を教育する時の優しくも厳しい思いやりの語彙を豊富に操り、親を介護していくための忍耐強くもひた向きの姿勢、働く時に出会う客達や協力し合う仲間達への細やかな神経と柔軟な状況判断力とを微笑みの中に滑り込ませていく。数多有る舞台・ステージにおいて、相応しい装いと出で立ちと心持

ちとを、音とリズムとで聴覚に心地良く響き渡るように視覚に凜としてうったえる音色を見事なまでに奏でてみせていく。トランズナショナルな現在、この舞台・ステージへの眼差しとはグローバルな欲望が縦横に交叉する。こうした「身体」は「セルフ・オリエンタリズム」(Kondo 1997:72-95)の媒体ともなり、他方で、男性中心的な国際労働分業体制の「情動労働」を進んで「憧れる」気持ちに裏付けられたパフォーマンスでもある。女性の「身体」がこうしたグローバルな舞台・ステージにおいて、男性のヘテロセクシズムの欲望の中に再構築され、家父長制の言説の一つの物語を奏でるのである。この体制維持と賞揚のスペクタクルの上演と演奏のために、いかなる楽器をいかなる技術でどのようなメロディーで奏でるのか、いかなるリズムを刻んでいくのか、どのような衣装で登場し、その演奏が、ソロリストとして求められているのかアンサンブルを編成していくのか、その都度異なる類いの気紛れな聴衆の前で多様にその音色を巧みに変化させていく柔軟さが求められているのである。

しかし、状況は、それだけではない。他方で、そうした権力の聴衆には迎合しない異種編成音をグローバルなコンテキストで奏でていきたいと渴望する「消費」による美を徹底的に追究する。グローバルな消費社会にあっては、例えば、身につけていくファッションのマテリアルが欧米社会のどの地域でデザインされ、いかなる意匠をこらして加工されされたものであるかという知識と、それらを選びとることのできる洗練された趣向を身体化させる。流行を「先取りする」衣服をまとうことで「古い」自分から「新しく」なれる自分を想像し、「憧れる」ライフスタイルの空間を手に入れることで「コスモポリタン」な自分を美化し、自分を演出するテリトリー、それが時間帯刻みで巧みに変えていく「着まわし」であれ「ヘアアレンジ」であれ「メイク」であれ、友人と食事をする「気に入りの」ところであれ、「自分らしさ」を磨いていく。一人一人が消費社会においては、演奏家であり作曲家である。

その美学は徹底した現世利益主義に基づく物欲が根底にあり、自己の自己による自己のための物語と音色とを重ねていくことで、領土を超えた時空に、スペクタクルとして展開させていくものである。舞台も聴衆もトランズナショナルで、演奏家である「自分」もまたグローバルな知識と趣向とを表現していく。現状維持の演奏方法とは異なった「自分」を表現するための奏法で、異なる音色とリズムを即興的に展開させていき、スリルとテンションの高揚を求め、「魂」が揺すぶられる思いがし、違った雰囲気醸し出し、違った心地良さと、違った満足感を与えていく。ここに、権力に対しての抵抗言説が、オールターナティブな世界を、挑戦する姿勢を、社会の葛藤を敢えて超越していくしたたかさを、またもう一つのスペクタクルとして展開していく。「品格」の演奏を構成する主題、旋律、陳述とはまた違う世界を表現していく。「消費」を巡る言説が、「生産」を巡る男性中心主義的言説に対して、サイド(Said1993:272)の言う「対抗の物語・カウンターナラティブ」として、「樂觀的な物語・オプティミスティックナラティブ」として繰り返されていく。その「消費」を巡る「対抗」の言説は、消費する人々に「束縛から自由」になった「個人化」された熟達した技能をもたらし、充足感と充実感をもたらしていく。だが、同時に、その内面においては「虚構」であり「欠如」した自分を映し出す「反転した鏡像」である。そうした演奏に男性の欲望の眼差しが注がれ鑑賞され評価され、演奏家は当然その審美眼にゆすぶられる思いに締め付けられる。

ネオリベラリズムのグローバリゼーションにおける「主体」は自己の欲望など満足に手に入れることができないため、絶えず揺れ動く時の変化に対する不安に悩まされ、枯渇した状態に置かれる。アイデンティティ構築の「物語性」や「ストーリー」を形成する舞台とは不安定なもので何時何処で変化するかわからない。つまり状況コンテキストが複数性を孕んでおりそれに適応しなくてはならないものである。一定の地域や社会環境や生活空間で織り

成される人の在り方、つまり「ハビトウス」は、もはや動的に構築されるだけではない。複数のコンテキストと行く先の不安定なトランズナショナルな現在、人はこの「ハビトウス」を複数同時に使いこなしていく術を持たねばならない。こうした状況を「ハビトウスを持たないハビトウス」とヴィルノ(2004:159)は指摘する。この時に感じる苦境、挫折感、絶望、喪失、苦痛などはつきものである。しかし、そうした状態を肯定的に受け入れていこうとする作用が生じる。

ラカンの概念である「大文字の他者」より形成される言語の「象徴界」の働きかけで、主体が動的に形成されていくが、その言語の作用に絡み付く誤認、削除、錯覚ゆえに、欠如、空無、虚構を主体にもたらず。「わたしは欲望する主体である」とは「わたしは存在秩序の中での欠落部分であり、空無である」ことをも意味する。ここに、殺伐とした「現実界」が広陵と広がっている。例えば、喪失感や挫折や慟哭を経験したときの虚無感がそうであるように、主体は「現実界」における人間の至らなさによる情動のうねりの中に晒され、成す術もなく時が流れていくのを待つ。ジジェク(Zizek 2000:281)はデカルトの人間の自己認識の在り方をラカンを介して以下のように言う。「我苦しむ、ゆえに我存在する」と。その苦しいことを自らが積極的に体験し、そうした状態を認めてもらおうとする主体の在り方がそこにある。「享楽」とはこうした根本的喪失があって初めて、代替物を欲望しようとしては挫折していくプロセスにおいて見いだされる。「想像界」における「小文字の他者」である異質な複数の「他者」達との関係において、敢えて絶望的状态が潜在的に存在しているのだということを受け入れ「享楽」を見いだす。換言すれば、主体形成とはマゾヒズム的な構築物である。ここで「象徴界」が機能していない統合失調症などの精神疾患に陥った場合、こうした不安感を一気に現実のものとして引き受けてしまう状態になる。だが、そうではない通常の人間の場合は、こうした痛み、悩み、苦しみ、悲しみ、喪失感、

挫折感など人が生きていくうえで経験せざるをえない「現実界」を通じてのアイデンティティ構築が人格形成として密接に絡み付いているのである。

見てきたように、ネオリベリズムという徹底した合理化の波の中で、この現在その人を人たらしめる社会との繋がりである「恒常性」が危機に晒されている。家父長制的グローバリゼーションの中枢に入れることはなかなか出来ないサバルタン状況として構築されがちな日本の女性達は、「個人のための消費」の言説を通じて、そうした男性中心的グローバル資本主義体制の揺れ動く不安定な舞台装置において抵抗的協調をしているという陥穽に陥っている側面は確かにある。しかし、周縁に配置された女性達はオルターナティブなステージを持ち、個人の消費と美の競演の抗争を繰り広げていくことで、個人がそれぞれにこうした現実の葛藤と苦痛と喪失感を内面に背負っていることを認め合うという舞台をも持っているのである⁽⁷⁾。

ネオリベリズムを追究してきたトランズナショナルな「状況コンテクスト」にローカルな日本の女性による消費社会の抵抗言説の文化を配置させてみると、主体のあるべき理想だけでなく、人間としての脆さや、人の痛みを社会的に共有する媒体として機能し、他者との関係で構築される人間性を再確認する装置であると解釈することができる。瓦解しつつある「象徴界」において、人は不安と枯渇に苛まれる中で、本来女性がどうあるべきか、本来人間が人間たる意味とはいかなるものかを問いかけるものであった。オルターナティブなアイデンティティを「美学的ジャンル」を通じて再確認し、再構築していく。それを通じて、この社会での女性の在り方に注釈を加え、その困難な状態の理解者を社会に求め、家父長的な権力構造に抵抗を加え、目的追求のグローバルな資本主義における人の在り方に疑問を投げ掛けていく。自らを表現していくアイデンティティ構築には、こうした縦横に交叉し横断するポリティクスを読みとることができる。

文化的に規定された「日本人女性」の「品格」を期待され、それらを見事

に身体化させてみせる。が、そうしたヘゲモニーからの呼び掛けに「一方的に応じることなどできかねます」、「あなたたちは人間としてこういう大切なことを忘れていきます」、「わたしは例えばあなたたちの力では到底できないことを試みているのです」、「わたしは生物学的な時間を超越する試みをしています」、「わたしはあなたたちには経験の無いような苦悩とむきあっています」。例えば、こうした凜とした声が「編成・オーケストレーション」として「即興・インプロヴィゼーション」として響いて聴こえてくる。対面をつくり社会の公の場での振る舞いを身に付けていくことが強制される一方で、自己が自己であるという「固体化」させることもかなわない状況で、自己を変幻に変化させてみせているのだ。そこで、聴衆にその様々な「わたしの物語」が理解され、評価され、感動を与え、聴きとどけられるかどうかは、「わたし」は知る由もないのだが、知るつもりなども無い。そうではなく、そこでは、女性達の「身体」が奏でる「音」には、同じグローバルな「状況コンテキスト」を異なって解釈し、自らが操作し、抗う形で、自己を演じている演奏家あるいは音楽家として無心に「闘う」姿があるのだ。自己の存在理由としての心の求める内的な充足感、安寧、魂の安らぎを見いだそうする「治癒する」姿があるのだ。ヘゲモニーの呼び掛けである「他者との関係性」を敢えて「無視」し、本来在るべき姿としての複数の他者との構築物であるはずのアイデンティティ形成へ単純に向かわせることはしない。むしろ、一度、見事に男性中心的なグローバルな会場の聴衆に見事に演じてみせた上で、それを攪乱させ、「個人」の様々な技巧でインプロヴィゼーションを不協和音をも奏でていき、ヘゲモニックなサウンドに抵抗するオルターナティブな音の祭典を展開させてみせている。

そこで、例えば、メディアに登場するスピリチュアリストの発言を聞く事でこうした自己回帰的な内的安堵感を肯定する。ここで象徴的に再構築されているのは、日本人の女性が、自己内面的な「癒し」を求めるスピリチュア

リズムを媒介して、いわば、現実における社会の上下関係、規律、品格ある態度を、絶えず他者との関係性で打ちひしがれているのだということ、更に、そこまでの立場を獲得するためには困難と疲弊と挫折すら存在しているのだという「現実」があるのだという重層的な政治学的意味である。こうしたヘゲモニーに配置された「女性」の在り方に抵抗して、その在り方とは異なるオルターナティブな人の在り方、例えば、個人が求める幸福感、恋愛成就、理想像、美意識、物質欲望、充足感などもまたグローバルな世界秩序の状況コンテキストの中で人間であること存在理由であるのだという意志表現がなされているのである。

結語

自己を構築する「想像力」とは、「他者性」である不透明性、排除、疎外、矛盾、対立といったものを前提として、展開されるもので、それらを自己のアイデンティティ形成の中で取り込み否定していき超越していき統合していくことのできる能力である。こうした「他者性」との縦横な遭遇と葛藤と努力において、アイデンティティは確立するのである。グローバリゼーションを動かす原理とは、利便性、快適性、無駄を省こうとする合理性などを追求するものであるが、この原理は見て来たように自己が自己であるための「象徴の貧困」そうして「個体化の貧困」をもたらすものであった。また、男性中心的なグローバリズムの生産の言説とは、本来追究してやまないものとは逆の方向へと人を追いやっていくもので、絶えず、不安定性、欠如感、焦燥感、嫌悪感、不満感、虚無感、挫折感、絶望感に満ち満ちた世界をも造り上げていくというアンタゴニズムを孕んだものであった。これでは、「他者」との関係において、人間関係で生ずる摩擦を最小化させ、困難を受け入れて超越しようとする意志を歪曲させ、自ら回りの人々との関係において苦慮しながらも意志を貫こうとする人間力を弱体化させてしまう。「他者」との関

係性を超越できるようにならなくては、アイデンティティ構築を可能にする創造力は崩壊してしまう。瓦解しつつある「主体」形成の基盤は、しかし、消費の言説の闘ぎあいから再構成していこうとする。個人の美を競う消費活動は、同時に洗練された個人のセンスと内的な趣向とを披露していく舞台であり、既存の男性中心的欲望によって練り上げられたヘゲモニーへ畳み掛けていく。そこに、自らの立場のアイデンティティの正当化をネオリベリズムを進めていくグローバリゼーションの流れにおいて示しているのである。「身体」とは、グローバリゼーションの荒波に「消費の言説」と「生産の言説」が闘ぎあったり抗争しあったりする殺伐とした場である。しかし同時に、「身体」とは、トランズナショナルに展開されるグローバリズムの男性中心的ヘゲモニーを変幻自在に再解釈する流動体的な媒体でもある。そうして、女性の「身体」とは、このように、グローバルに展開される男性中心的な編制体の在り方を象徴すると同時に、それに対抗する形で美的に洗練された個人の在り方をも提示していく政治学が働く場である。

注

- (1) スピヴァク (Spivak 1993,1999) は、この概念を発展させ、ポストコロニアルの現在、例えば、第三世界において農耕や牧畜などの労働をする女性、植民地化された人々、労働者といった西洋中心的歴史の中で消されていった人々の生の声が、社会においては無視され、かき消されてしまっていると、それらを浮き彫りにしていくことが困難な作業であるが重要な知的育みとして捉える。
- (2) 「言説」とは単に言葉や言語を指すのではない。そこには言説を通して生活空間や社会構造が構築され、支配を必然的なものとして認識されるように知が形成される。知識と権力は言説で結びつけられ、人間の行動や発

話や見方自体をも規定していく働きがある (Foucault 1979)。

- (3) スピヴァクは「サバルタン」を第三世界の女性労働者に主に焦点をあてているが、実際、これは一枚岩的なものとして、従属的立場に置かれた人々が、ソリッドな地域に内在されているものではなく (Spivak 1999)、ポストフォーディズムの現在第一世界内においても家庭においてサバルタン状況が構築されていることが指摘されている (Hardt& Negri 2004)。
- (4) 非西洋社会をこうした欧米の社会科学と文芸評論の中枢の理論や概念を使い、それ以外の場では「声」として「語る」ことのできない人々を表象させていく試みを、西洋の概念で表象させるということで「皮肉」なことではあると認めているが、サイド (Said 1993:216) は重要かつ必要不可欠な視点であるとし、『文化と帝国主義』の中で、「遡航 (voyage in)」と呼んでいる。バトラーやスピヴァクら、この論考でのポスト構造主義の脱構築による解釈もこの政治性の意味と重なりあうものがある。
- (5) 「ハビトゥス (habitus)」はラテン語の *habere* (持つ) の派生語で、英語の *have*、フランス語の *avoir* の語源。フランスの文化人類学者でもあり社会学者でもあるピエール・ブルデュー (Bourdieu 1987) による概念。「趣向、態度、外観、服装、様子、習慣、気分、性質」などの意味。つまり、男性と女性とではこうした「ハビトゥス」が、それぞれ異なる経験を経て、異なる社会的期待をかけられていくことによってジェンダー差異が生まれていくという議論を更に展開している (Bourdieu 1998)
- (6) 人間の経験を科学や医学や自然科学の領域では説明しきれないものを、宗教的独自の「法則やパワー」に基づいて「霊的」な説明が、現代人に浸透してきている (磯村 2007、島藺 2007、香山 2006)。圧倒的に女性の支

持者が多い。江原啓之はその著明なスピリチュアルを説く「カウンセラー」である。2001年に刊行された『幸運を引き寄せるスピリチュアルブック』は人気を博し、これは、「女性の生き方」を扱う三笠書房の王様文庫から刊行されている。その読者の一人である林真理子は、「江原さんは人生のカウンセラーだ」と推薦の言葉を寄せる。また、働く三十代の未婚女性の葛藤を綴った『負け犬の遠吠え』の著者酒井順子は女性達の間で大きな反響をよんだが、彼女もまたスピリチュアリズム支持者でもある。女優としてだけでなく国際親善や環境問題にも取り組み、公的な立場で注目を浴びる藤原紀香も、自身の著『紀香魂』の中で、そうした霊的存在を積極的に肯定し、自己の在り方の一つの捉え方として、そこから得られるものを吸収している。

- (7) ジェームズ・スコット (Scott 1990) は、社会的に抑圧されている弱者とは、権力を握る者に対して、「隠された筋書き」として比喩的に日常の生活における不満と反抗とを表現するとしている。公に見せる態度とは本心ではなく、「隠された形」で弱者は感情を露にするとしている。しかし、このモデルは、あまりにも単純で、現実のアイデンティティ構築の入念かつ美的側面を見逃していると言わざるをえない。政治的に経済的に困窮している人々は、その状況を自らの意志を自らの価値観と世界観を通じて発言していく姿勢を持つことを認識しなくてはならない。例えば、イスラーム世界の女性の被るヴェールの彼女達自身の文化的意味が示唆するように、複数の人々のメッセージとは、西洋の既存の価値基準ではかることはできない (Butler 2004)。

<参考文献>

- Baumann, Z.(2000) *Liquid Modernity*. Cambridge: Polity Press. (2001『リキッドモダニティ』森田典正訳、大月書店。)
- _____ (2004) *Work, Consumerism and the New Poor*. Philadelphia: Open University Press. (2008『新しい貧困—労働、消費主義、ニュープア』伊藤茂訳、青土社。)
- _____ (2005) *Liquid Life*. Cambridge: Polity Press. (2008『リキッド・ライフ』長谷川啓介訳、大月書店。)
- Bourdieu. P. (1987) *Distinction: A Social Critique of the Judgment of Taste*. Cambridge: Harvard University Press. (1990『ディスタクシオン—社会的判断力批判』石井洋二郎訳、藤原書店。)
- _____ (1998) *Masculine Domination*. Stanford: Stanford University Press.
- _____ (1999) *Acts of Resistance: Against the Tyranny of the Market*. New York: New Press.
- Butler, J. (1990) *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. New York: Routledge. (1999『ジェンダー・トラブル』竹村和子訳、青土社。)
- _____ (1993) *Bodies that Matter: On the discursive Limits of “Sex.”* New York: Routledge.
- _____ (2004) *Precarious Life: The Powers of Mourning and Violence*. New York: Verso.(2007『生のあやうさ』本橋哲也訳、以文社。)
- _____ (2005) *Giving an Account of Oneself*. New York: Fordham University Press. (2008『自分自身を説明すること—倫理的暴力の批判』佐藤嘉幸・清水和子訳、月曜社。)
- Connell, R. W. (1987) *Gender and Power: Society, the Person and Sexual Politics*. Oxford: Basil Blackwell Ltd. (1993『ジェンダーと権力—セクシュアリティの社会学』森重雄訳、三交社。)

- _____ (2002) *Gender*. Cambridge: Polity Press.
- Derrida, J. (1976) *Of Grammatology*. Baltimore: Johns Hopkins University Press.
(1996『グラマトロジーについて』足立和浩訳、現代思潮社。)
- Fisher, H. (1982) *The Sex Contact: The Evolution of Human Behavior*. New York:
William Morrow. (1998『結婚の起源 — 女と男の関係の人類学』伊沢
絃生・熊田清子・久木亮一訳、どうぶつ社。)
- _____ (1999) *The First Sex: The Natural Talents of Women and How They Are
Changing the World*. New York: Ballantine Books. (2000『女の直感が男
社会を覆す』吉田利子訳、草思社。)
- Foucault, M. (1977) *Discipline and Punish: The Birth of the Prison*. New York:
Vintage/Random House. (1977『監獄の誕生 - 監視と処罰』田村俣訳、
新潮社。)
- _____ (1980) *Power/knowledge*. New York: Pantheon Books.
- 船曳建夫 (2003)『「日本人論」再考』日本放送出版協会。
- Gidens, A. (1991) *Modernity and Self-Identity; Self and Society in the Late Modern
Age*. London: Blackwell Publishing.(2005『モダニティと自己アイデン
ティティ』秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳、ハーベスト社。)
- Gramsci, A. (1971) *Selections from the Prison Notebooks*. Edited and translated
by Quintin Hoare and Geoffrey Nowell Smith. New York: International
Publisher.
- Hardt, M. & A. Negri (2004) *Multitude*. New York: Penguin Press. (2005『マルチ
チュード』幾島幸子訳、水島一憲・市田良彦監修、日本放送協会。)
- Harvey, D. (2005) *A Brief History of Neoliberalism*. Oxford: Oxford University
Press.(2007『新自由主義』渡辺治監訳、作品社。)
- 磯村健太郎 (2007)『<スピリチュアル>はなぜ流行るのか』PHP 新書。
- 香山リカ (2006)『スピリチュアルにハマる人、ハマらない人』幻冬舎。

- 榎村愛子 (2007) 『ネオリベラリズムの精神分析：なぜ伝統や文化が求められるのか』 光文社新書。
- Kondo, D.K.(1997) *About Face: Performing Race in Fashion and Theater*. New York: Routledge.
- Lacan, J. (1966) *Ecrits*. New York: W.W.Norton
- Said, E. (1978) *Orientalism*. New York: Pantheon Books.(1993『オリエンタリズム』板垣雄三・杉田英明監修・今沢紀子訳、平凡社。)
- _____ (1991) *Musical Elaborations*. New York: Cambridge University Press. (1995『音楽のエラボレーション』大橋洋一訳、みすず書房。)
- _____ (1993) *Culture and Imperialism*. New York: Vintage. (2001『文化と帝国主義』大橋洋一訳、みすず書房)
- _____ (1994) *Representations of the Intellectual*. New York: Vintage.(1998『知識人とは何か』大橋洋一訳、平凡社。)
- Scott, J. (1990) *Domination and the Arts of Resistance: Hidden Transcripts*. New Haven: Yale University Press.
- Sedgwick, E.K. (1990) *Epistemology of the Closet*. Berkeley: University of California Press. (1999『クローゼットの認識論』外岡尚美訳、青土社。)
- Spivak, G. C. (1993) *Outside in the Teaching Machine*. New York: Routledge
- _____ (1999) *A Critique of Postcolonial Reason: Towards a History of the Vanishing Present*. Cambridge: Harvard University Press. (2003『ポストコロニアル理性批判』上村忠雄・本橋哲也訳、月曜社。)
- ステイグレール、B. (2006) 『象徴の貧困』 新評論。
- 島蘭進 (2007) 『スピリチュアリティの興隆』 岩波書店。
- 上野千鶴子 (1990) 『家父長制と資本制』 岩波書店。
- _____ (2002) 『差異の政治学』 岩波書店。
- ヴァイルノ、P. (2004) 『マルチチュードの文法：現代的な生活形式を分析する

トランズナショナルなコンテキストで構築される
ジェンダー・アイデンティティの力学

ために』月曜社。

Zizek, S. (2000) *The Ticklish Subject: The Absent Center of Political Ontology*.

London: Verso. (2007『厄介なる主体』鈴木俊宏・増田久美子訳、青土社。)